

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成27年10月22日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科

職 名・学 年 博士課程1年

氏 名 高 橋 健 二

助 成 の 種 類	平成27年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	第16回国際サンスクリット学会 16th World Sanskrit Conference		
発 表 題 目	Manas as the First Evolute in the Account of Creation in Mahābhaarata XII.224		
開 催 場 所	バンコク・シルパコーン大学 (タイ)		
渡 航 期 間	平成27年 6月27日 ~ 平成27年 7月10日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	150,000円	
	使用した助成金額	150,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助 成 金 の 使 途 内 訳	航空機代 34,060円	
		自宅～関西国際空港 交通費 7,200円	
学会参加費 36,000円			
現地滞在費 72,740円			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) このたびは本発表に助成をいただきありがとうございました。今回は出発前に渡航計画の変更などがありましたが、柔軟に対応していただき、大変たすかりました。また申請や報告などの事務手続きも明快で簡略なため、時間の節約となり、その分研究や発表準備に集中することができました。またもし可能であれば、国際研究集会発表での発表原稿やハンドアウトのネイティブチェックの支援も合わせていただけると、とても有難いと感じました。今回は知人の先生方にチェックをいただけたのですが、今後業者やアルバイトをお願いすることになった場合に、国際研究集会発表の支援と合わせてそのような支援がいただけると、より効果的に成果を発表することができると思います。		

成果の概要／高橋健二

平成 27 年度京都大学教育研究振興財団（国際研究集会発表助成・若手）

第 16 回世界サンスクリット学会派遣 (The 16th World Sanskrit Conference, 於バンコク、タイ)、世界サンスクリット学会後サンスクリット合宿 (The Post-WSC Sanskrit Retreat,), One-day conference 成果報告書 (2015/06/27~2015/0710)

2015/10/22

文学研究科文献文化学専攻インド古典学博士課程
高橋健二

今回の派遣では、6/28-7/2 の第 16 回世界サンスクリット学会、ならびに 7/5-7/9 の世界サンスクリット学会後サンスクリット合宿、ならびにサンスクリット合宿中の One day conference (7/6)に参加してきました。

世界サンスクリット学会 (The 16th World Sanskrit Conference, 6/28-7/2) は、サンスクリット学分野において世界最大の学会です。当学会は、今回はタイのバンコクで開催され、インド、欧米諸国、東アジア諸国を中心に各国から計約 800 人もの研究者が参加し、過去最大規模のものとなりました。

申請者は、『マハーバーラタ』と『ラーマーヤナ』部会にて研究発表を行いました。『マハーバーラタ』と『ラーマーヤナ』とは、紀元前 2 世紀頃から紀元後 2 世紀頃に成立したとされるインド二大叙事詩です。両作品はそれぞれ英雄物語を軸に、さまざまな神話・逸話・物語・哲学的思弁が織り込まれた非常に長大な作品です。この二つの作品のために一つの独立した部会があてられるほど、両作品は、文学・宗教・哲学・文化などあらゆる面において、インド、ひいてはアジア文化圏全体にわたって大きな影響を及ぼしてきました。その魅力と重要さゆえに、約 200 年前に西洋世界において「サンスクリット学」が成立した当初から研究者たちの関心を集め、今日においても世界中で研究され、次々と新しい発見がなされています。

申請者は両作品のうち、『マハーバーラタ』において挿入されている哲学思想について研究発表を行いました。古代インドにおいては、紀元以降くらいは、「六派哲学」と呼ばれる古典的哲学派がではじめるのですが、『マハーバーラタ』には学派として確立する前の、初期の形成過程の哲学的思想の断片が残されています。これらの哲学的断片を研究することによって、古代インドの哲学者たちが、どのような問題意識をもって、その独特の思想をどのように形成していったのかを解明することができ、また『マハーバーラタ』以降の古典的哲学の真の意味を問うヒントを与えてくれるのです。

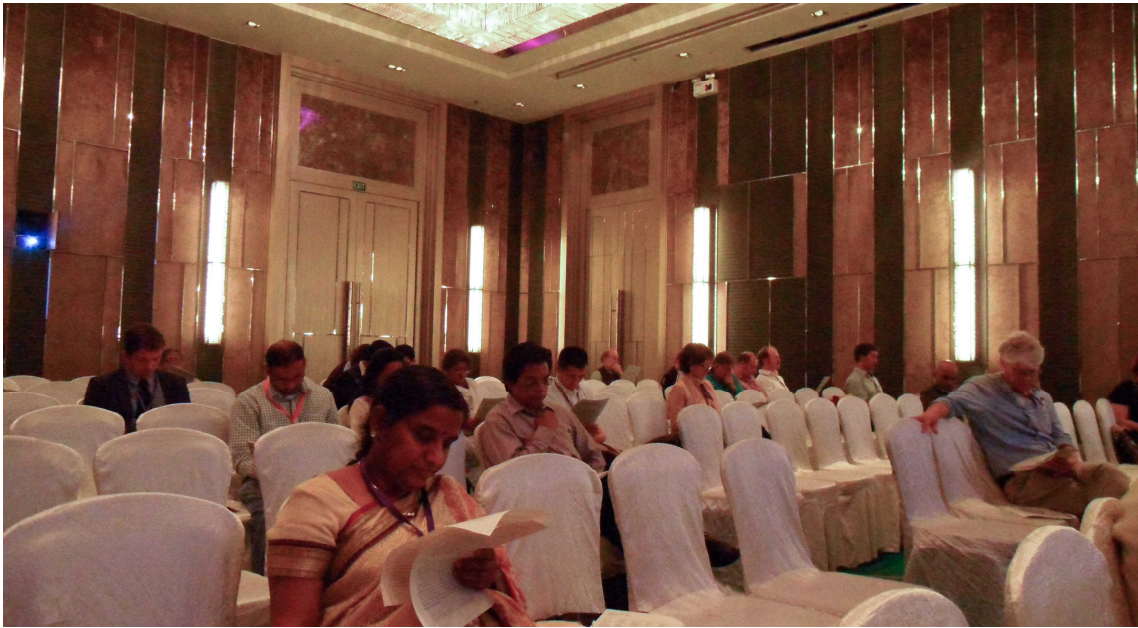
申請者が専門とするのは「六派哲学」のうち、サーンキヤ哲学派の特に創造説です。サーンキヤ哲学によると、この世界は、まず初めにプラクリティと呼ばれる根本原因

があり、そこから知性、自我意識といった精神原理が生じ、さらに自我意識から、心やさまざまな元素、諸々の感覚器官や運動器官が生じたとされています。知性・自我意識といった精神原理から、物質的なものが生じたと、どうしてサーンキヤの哲学者が考えるに至ったのかを、『マハーバーラタ』に残されている初期のサーンキヤ哲学の文献を研究することで、思想的に解明することが、申請者の博士論文のテーマです。

今回の世界サンスクリット学会においては、『マハーバーラタ』において *manas* (心) が重要な役割を果たす初期サーンキヤ哲学の創造説を取り上げ、上記の問題の解決についての糸口を提示することができました。具体的には、まず『マハーバーラタ』に先行するヴェーダ文献における創造説と比較することで、ここにおける「心」とは創造神がこの世界を創造しようとする意志のことを指す、という意味で、先行するヴェーダ文献との連続性を指摘しました。しかしこの創造説は先行する思想の単なる受け売りではありません。この創造説においては心から諸元素が創造されます。そしてここでは心は「顕現」であると特徴付けられるのですが、その裏には、心の後に創造される諸元素に共通して見られる性格が、諸元素の原因としてある心に存在するはずだ、という考えがあることを指摘しました。少し遠回しな表現をしてしまいましたが、要するに、この初期サーンキヤ哲学において、諸物質世界の原因としての心を、心からの被造物である諸元素から定義しようとする思想的発展があったことを指摘しました。

発表に対しては高い評価をいただきました。特に今回扱った『マハーバーラタ』の部分は多義的で非常に解釈が難しく、先行研究も踏まえつつ、文脈に沿った妥当な解釈を与えたことについて高い評価をいただきました。一方で、比較に用いたヴェーダ文献における創造説について、解釈についての難点をいくつかご指摘をいただき、また今回の発表内容の、サーンキヤ哲学史全体における意味や重要性について、示唆的な意見をいただくことができ、非常に実りの多い研究発表となりました。現在はいただいた指摘や意見を踏まえて、学会のプロシーディングスに論文を投稿するための準備をしております。

発表時の写真



学会後は、タイのマヒドン大学人文学部仏教学科主催のサンスクリット合宿（The Post-WSC Sanskrit Retreat, 7/5-7/9）に参加し、参加者との交流を深めるとともに、学会で発表したものと同内容で、One day symposium において研究発表を行いました。なお、One day symposium での研究発表は、Youtube の以下のサイトから視聴可能です。

Part 1: <https://www.youtube.com/watch?v=TMNYvimGUBE&feature=youtu.be>

Part 2; https://www.youtube.com/watch?v=6_MUyyfSnGU&feature=youtu.be